Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>レイナー・バンハム=著　岸和郎=訳　「建築とポップ・カルチュア」　鹿島出版会，1983年8月初版
Author(s)	向井，正也
Citation	デザイン理論. 1984, 23, p. 104-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52569
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

レイナー・バンハム＝著
岸（きし）　和郎（わろう）＝訳

「建築とポップ・カルチュア」

鹿島出版会，1983年８月初版

訳者は京都大学建築学科，及び同修士課程を修了後，黒川雅之建築事務所を経て現在京都芸術短期大学講師。現代の都市，建築の研究の第一線にある気鋭の建築学徒である。著者であるイギリスの有名な建築評論家レイナー・バンハム（1922―）は，本書巻末の著作目録にも示されているように，その論文エッセイの類は，実におびただしい数に上るものだが，邦訳されたものは，ほんの数える程でしかない。これは訳者も，「あとがき」で認めているように，ひとつには彼の「機知に富み難解でさえある」文章のせいであったのではないか。かくいう私もバンハムの学位論文で，単行本として出版された“Theory and Design in the First Machine Age”(1960)の邦訳を試み，何辺もアタックしてははねかえされ，とうとう断念した苦い経験がある。それだけに，本書が邦訳された時，そして特に，環境工学を扱ったバンハムの「環境としての建築」が京大の先輩に当る堀江悟郎教授によって完訳を見た時は少なからずショックをうけたものだが，今またそれを若い同学の後輩からうける破目とは相成った。ともかくもまずこの困難な訳業の完成に対して訳者に深い敬意を表するものである。

訳者は本書の翻訳の動機として，「あとがき」の中で，「近代主義の終焉が語られ，ほんの20年前の出来事さえどう評価していいかわからなくなっている現在，それらを再検証したいというのが訳者の密かな想いだった」とのべ，そうした期待に対して，「本書は相当応えてくれたように思う。それは本書の編者が，バンハムのように1950年代，1960年代を同時代人として生きた人間ではなく，その時代を一つの過去として受け止めることのできる人間であり世代でもあることと無関係ではないような気がする」とのべている。本書はバンハム著とはなっているものの，その実はペニー・スパーク（1948～）という若い女性の研究者によって編集されたアンソロジーなのである。そして，このように語る訳者もまた編者と同じ世

代（1950〜）に属するという点に，私はまず，よきにつけ悪しきにつけ，本書にひそむ何らかの問題のにおいをかぎとるのである。著者は本書の「はしがき」のなかで，編者に感謝してはいるが，彼自身がやったら，もっと異ったものになったであろうとのべ，「これは彼女のアンソロジーであり，私のではない」などと皮肉な口吻で，本書がある一人の女性の手で編集せられたことを強調している。おもうに著者は編者の論文エッセイの選択や配列について，同調出来ないところが多々あったのではないか。そこに私はまず何よりも著者と編者との間の，価値観の上での抜きがたい世代の差を感じとるのである。

本書の内容はまず2大別される。(I)20世紀の建築—歴史・理論・評論，(II)ポップ・カルチュア—理論とデザインで夫々12〜3の論文，エッセイから成る。それらは，各部ともに初出が50年代半ばから70年代半ばにも及び（大半は60年代）ものだが，問題はその配列の順序が一見ランダムに乱れていることと，初出のすべてが月刊商業誌である上に，それらの性質が，アカデミックな性質の濃い建築雑誌からポピュラーな娯楽雑誌に至る間に，住宅，インテリア関係，インダストリアル・デザインなど7種にも及ぶ読者層に関してかなりのヴァラエティに富んだものになっていることである。しかもその配分の方もかなり恣意的で，(I)の建築関係では，権威あるイギリスの建築雑誌，アーキテクチュアル・レヴュがその半ば以上を占めているのに対して，(II)のデザイン関係では，全体が6種にも上る雑多なものの混成によるものである。配列の順序はさておくとしても，選択の上でもう少し何とかならなかったものかとは，著者ならずとも思われよう。とりわけ著者と同じ世代に属する私など，著者が，これは私のアンソロジーではない，と言った気持がよくわかる。

次に問題は，著者に，というより，前述のように本書をかなり評価している訳者に対して少々申訳ないが，本書の内容のことである。そのほとんどが50年代から60年代にわたってものされたこれらの論文エッセイは，60年代末から70年代にかけての，〈近代主義の終焉〉の激動の嵐をくぐって来た，いわゆるポスト・モダニズム全盛の今日の目からすれば，かなり色褪せたものにしか映らないのは事実である。特に好んでトピックス的記事をあたりかまわず書き散らす，かなりジャーナリスティックな性格の強いバンハムが一般の読者層を相手に，気軽に酒落っ気まじりにものしたエッセイなど，その内容は時代の変化に到底耐え得ない性質のものと思われるが，さらに気になるのは，著者が読者層の違いによって立場や論調を変えてきたなどと告白している事実である。

もともとが学術書などではなく，雑文のアンソロジーなのだから，そう固くならずに軽い調子で楽しんで読む分には何ら差支えないとは思うのだが，著者としては，そうした本書の受けとめ方にはおそらく納得できないのではないか。察するに著者は，一見「軽評論」と受けとられやすい自分のジャーナリスティックな活動を，欧米の高い水準の学術的な諸活動に

伍して，決してひけをとるものではないと自負していることは「はしがき」の次のことばに端的に示されよう。「…重要な事柄については，〈堅い，まじめな〉言葉で論ずべきだと主張する人々が，私を攻撃していたことは承知していますが，マルクス，マンフォード，レヴィ＝ストロース，ガルブレイス，フロイトのような人々が些細な事柄を重々しい知識で語ろうとして引き起こしている混乱を見れば，私は他のことをやってもいいのではないか，そうすればもっと理解してもらえるのではないかと感じてきたのです」（岸訳）

だが，卒直にいって，私は本書を，前記訳者のいうようには評価することは出来ない。未来を先取りしようとする，ジャーナリスティックな著者の基本姿勢は，これまでしばしばその論議に何らかのかげりとなって来たことは否定出来ない。時代の変化や世の中の動きを，萌芽の段階で敏感にとらえて，それを新鮮で気の利いた建築論やデザイン・エッセイに仕立てあげ，そこから更に独自の理論をあみあげるといったことを著者はこれまでくりかえして来たわけだが，本書はそうした試行錯誤の一部の集成と見てよかろう。だがこうした軽薄な試みには必ずといっていい，早とちりという落穴がつきものである。新聞雑誌のよみすての記事ならいざ知らず，天下のレイナー・バンハムが，後から，あれは時期尚早だった，ではすまされまい。だが御本尊は案外そうした事には無頓着のようで，みずから考え方の変化を是認して，「変えることこそ考え方を持っている証拠」などとうそぶいたりしている。それ故著者はこれまで何度となくそうした理論上不本意な局面に遭遇して来たものとみてよかろう。かって彼が命名して，それを著書の上で理論づけた60年代半ばの建築の一潮流？「ニュー・ブルータリズム」なども，ほどなく手ひどい批判にさらされての立往生など，その一例であるが，これなどは，その「潮流」そのものの解釈も中途半端であったこともあって，やがてその後に展開する本格派？「ポスト・モダニズム」の波の大きなうねりの影に，いつの間にか歴史の上で立消えの状態になってしまっている。

こうしたことは本書の「ポップ・カルチュア」などについても同様である。このテーマなど，まだまだこれからが本番ともいえるほどのものなのに，既に50年代から早くも大衆の美学の方法論の探求として，II_2「使い捨ての美学」にあらわれるが，特に原書のタイトルにもなっているII_3「選択によるデザイン」は，アーキテクチュアル・レビュー」に掲載（1961）されただけあって，本書における白眉の論考といえるもので，この時点ですでに，プロダクト製品の判定基準が，モノとしての機能から，イメージとしてのデザインやスタイルに移向するという「消費社会」における「モノばなれ現象」をテーマにしているのはさすがだと思う。とはいうものの，これらの論考といえど，今日の眼から見れば，一口にいって何となくカビ臭いのも争えぬ事実であるとともに，一方こうした「消費」の問題に対するバンハムの「容認」の姿勢も気になることの一つである。「建築やデザインに向けられる彼の眼は，き

わめてヒューマニズムに満ち…」と編者はいうが，少くとも本書を通読した限りでは，ヒューマニズムなどほとんど感じられず，むしろ反対に「消費」問題に対する批判精神が見られないことなど，一般に著者の論考の大きな特徴としての，文明批評の欠落が問題視されるのである。

これには彼の特異な経歴も大きく作用しているのではないか。バンハムは第２次大戦中航空機の会社で機械工として働き，その後30才を越えてからロンドンに出て芸術大学に学び，以後一転して近代建築の研究者の道を歩むのだが，この「歩み」たるや，本書の目次にいみじくも示されているように，終始，建築とデザインの「二足のわらじ」によるものであった。未だに自から労働者階級出身を誇りとし，それ故にこそポップを主題として論ずる資格があるなどと考える彼は，その経歴のゆえか，根っからの機械好き，ガゼット好き，特に何よりもクルマ・マニアなのである。クルマこそは，彼が生涯にわたる研究テーマと考えるもののようだが，このクルマへの没入，のめりこみが，何よりも彼から高次の客観的，文明批評的，視点を奪い去った元兇のように私には思われる。不惑の年を越えて，かつは60年代末という時点でのロスアンジェルス礼讃など，信じ難いエッセイがとび出すゆえんである。

いま建築・デザインの世界は大きな転換期の渦中に立たされている。近代運動（モダン・ムーブメント）のパイオニアとその理論家たち，いわゆる第１世代のあとを受けた著者をふくめて，われわれ第２世代のデザイン理論家たちは，思えば不幸な星の下に生れたものだとつくづく思う。これもまた第１世代からそのままうけついだ，デザイン研究の方法としての実態論にこびりつき，状況把握にもたついている間に，第３，第４のヤング・世代の理論家たちは，新しい記号論などを有力な武器として，モダニズムへの「反」の理論を活発に展開する。せいぜいが「ネオ・モダニズム」くらいが関の山のバンハムにしても，その弟子チャールス・ジェンクスが「ポスト・モダニズム」の旗手であるという事実を，今日どのような気持で眺めているものであろうか。

本書は前述のように，個々の論考としては内容的に問題があるとはいえ，こうした20世紀のデザイン運動の激流の中に立った一人の理論家の歴史の一時期における人間像を示す，著者自からもいう，一つのバンハム論として，十分意義あるものといえるのではなかろうか。

（向　井　正　也）